下田　忠　著

瀬戸内の万葉

本書は、尾道市在住で、福山市の大学に勤めておられる著者が、瀬戸内地方を旅し、各地でかつて詠われた万葉の古歌の跡をたどりながら、その昔に思いを馳せ、また現代を見つめ直したものである。

本文は、播磨・淡路・備前・備中・備後・讃岐・伊予・安芸・周防・豊前、の十箇国に分かれる。現在の土地土地の姿を折りこみながら、歌の解釈、それが詠まれた背景、詠み手の心情などを述懐し、著者自身の感慨を綴っておられる。むだのない端正な文章の中で、歴史と現代、自然と人間とが融け合い、雄大な世界が展開されている。旅情をたたえた素朴で力強い自然を背景に、遠い昔である万葉時代が万葉びとの息吹きを伴って、現代に体現されるような思いにとらわれる。

しかし、万葉時代と現代とでは、自然のたたずまいはあまりにも変貌してしまっている。著者はそれを嘆き、「自然と人間との一体感」が失われていくことに対して、大きな危惧の念を抱いているのである。静かで押さえた筆致の下から、著者の万葉びとへのいつくしみの心情、万葉時代への限りなき郷愁の思いが、響いてくるようである。

本書は、万葉研究の書であり、歴史探訪の書であり、風土再発見の書でもある。

（46判、一九八ページ、昭和五九年一一月二〇日、桜楓社刊、一、六〇〇円）

（中峯　仙子）